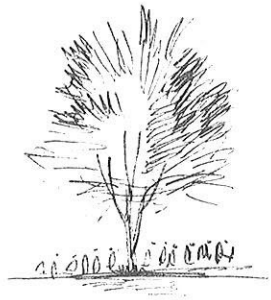
ひかりのこ

光の子



No.95　2001. 11. 1.

● 人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさいと、主は言われる。（ルカによる福音書 6：31）

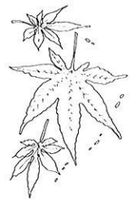
「とべとべ空へ」　　え・中島英子

「野菊晴」

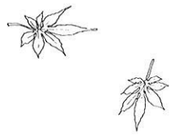
大利根の野の秋光を集めけり
草紅葉弥勒野浮野大利根野
しがらみに蛇籠かませて秋うらら
爽やかに光の子らに未来あり
と見かう見親の案山子と子の案山子
果皮裂くる通草と果皮の裂けぬ郁子
野菊晴光の子らのそれぞれに

落合水尾（『浮野』主宰）

発行／社会福祉法人 光の子どもの家　TEL／0480-72-3883　FAX／72-6649　振替／00130－1－128022
編集／光の子 編集委員会　e-mail:khikari@ceres.ocn.ne.jp　〒349－1155 北埼玉郡大利根町砂原277　印刷／社会福祉法人 共愛会



かがやく笑顔で



竹花　信恵

青空が澄みわたる、さわやかな季節となりました。暑かった夏を乗りきり子どもたちの心身はひとまわり大きくなって、ますますにぎやかな毎日です。

幼稚園、小学校で使い果たしたであろうエネルギーは帰宅と同時に補給されるのか、夕食ぎりぎりまで外でかけまわっています。大きな栗の実を拾ってきた次の日には、カブトムシの幼虫を持ち帰り、色づくことを心待ちにしていたカキの実は青、うちにもぎ取られ、がまの穂を分解し、次から次へと自然を味わっているひとときでもあります。

ひとつだけ取り付けてもらったバスケットゴールの下では、白熱したゲームが繰りひろげられています。声の大きさも増し、エスカレートした状況が伝わってくる頃、またトラブル発生。興奮したすさまじい声と共に部屋に飛び込んできた小学生。ほんのちょっとしたことが感情の爆発のきっかけになってしまいます。それを収めるには、まず落ち着くまで待つ、ということしかできません。自傷他害に気をつけて見守ります。

子どもたちの問題が難しくなった、深刻になったと、そんな声が聞こえてくるたびに、「そんなことないよ」と打ち消したい想いをずっと感じてきました。事実、子どもたちに支えられて立っている私たちです。かがやく笑顔は最高です。

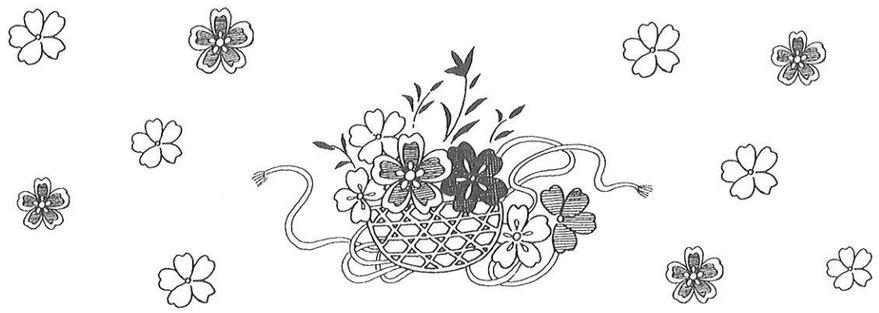
連日のトラブルの中で、心を受けとめることの、その重さでよろめいてしまう私たちです。体力と忍耐力を含めた力量の問題だと思う一方、「どうしてこうなる」と訳がわからなくなる言動の中で、エネルギーを吸い収られていくようなやりとりが日常化しているこの頃を振り返ると、一体これはどういうことだろうと考えざるを得ません。

できることと、できないことを適切に見分ける力と想いが求められているような気がします。

できることは、「生活の原点」に立ち返ることでしょう。朝早く起きて一日を始め、よく遊び、学び、おいしく食事をとり、そして、ぐっすり眠る。そんな基本の生活リズムがあれば、あとは自分で成長していく力が備えられている、それを信じていくことそれだけでいい、と思うようになりました。

親と共に暮らせない子どもたちの最もそばにいて守らなければならない立場にいながら今日も高校生に「大変だね」、中学生に「大丈夫？」と声を掛けられ、何だか申し訳ない思いでいっぱいになりました。と同時に人を思いやれる心を持った子どもたちであることを嬉しく思います。

ひとりひとりの、かがやく笑顔のあふれる家であり続けられますように、心から願っています。



学者もどきのつぶやき ⑤⓪

研究生活に別れを告げて

山形大学
学長　仙道　富士郎

皆様よく御存じのように、山形大学は前代未聞の五年間に及ぶ、四二八名の受験生に苦渋に満ちた生活をしいる結果となった入試ミスを起こしてしまった。コンピュータへの入力ミスという事故が、その道の専門家集団であるはずの工学部を舞台として起こったのだから恐ろしいものである。学長は道義的責任をとって辞任した。その後に行なわれた学長選挙で医学部教授会から推薦されて立候補し、学長になってしまった。

「しまった」という表現は、まことに正しく、何が何だか分らないまま、突如学長になってしまった感じなのである。そして、当然のこととして私は医学部の教授ではなくなってしまった。

この点は意外と御理解いただけないようで、教室の同門の教え子達でさえ「エッ」と驚く。学長の仕事は教授を兼任するほど、簡単なものではないということらしい。

いま医学部では小生の後任の教授の選考が開始されている。「あと二年半で退官だったのだから、二年半それが早く来たのだ。」と自分に言い聞かせてみる。しかし、そう言ってはみても、三五年もの間続けてきた研究生活に別れを告げなければならないというこの寂寥感を消し去ることは出来ない。八月二七日から始まった最後の医学部での一週間は、気がついてみると、机にぼんやりと座っていた。それが、私にとってどんな意義があったかは問わずとも、三五年間という年月はずしりと重い。

若いときは手にピペットを握り、年とってからはもっぱら机に座って、若い人達がやった実験の結果をまとめ続けた。国際誌に仕事が受理されたといっては喜び、酒を飲み、論文の掲載が拒絶されたといっては落胆してまた、酒を飲んだ。その結果が百数十編の英文論文、でもそれは私にとって、ましてや世にとって一体どんな価値があるというのか。とめどもなく続く、想いの中に私は投げ込まれてしまう。

それにしても、私の生活は全く変ってしまった。正確に九時四五分、拙宅にはいわゆる黒塗りのセンチュリーが到着する。別に悪いことをしている訳ではないのだが、自分には何とも似つかわしくないという想いが募り、近所の人に見られているのではないかと、ドキドキする。大学の本部に着くと、運転手さんは小生のカバンをかかえて、小走りに玄関の入口の階段を上り、ドアのところで、うやうやしく小生にそのカバンを渡してくれる。八月末に打ち合わせに見えた事務の方が「帰りは、何もなければ五時頃で・・・」と言う。私はとっさに強い口調で「否それは困る」と言った。「自分の好きなときにタクシーででも帰るから・・」。しかし、次の日私はいたく反省していた。私に運転手さんの仕事を奪ってしまう権利などないのだ。私は何もなければ（実は半分ぐらいはそのあと酒を飲む、いや別に飲む必要がないのだが、出されると飲んでしまう〈仕事〉がある）、五時には大学を出て、五時十五分には自宅に到着する。

これまでは自宅に帰る時間が遅かったこともあり、研究者になって以来、帰ってから仕事をする習慣がない。所在なくビールなどに手をつけてしまう。困ってしまうのは小生だけではなく、愚妻も外で遊ぶ（？）時間が制限されてしまう羽目になり、ブツブツ言っている。

でも、さすがに就寝の時間は早くなり、朝も五時頃から起きて、まだ終っていないテストの採点や、論文の手直しなどをしている。朝めしを食べる時間や、朝風呂に入る時間を除いても、タップリ三時間はあり、朝の時間の有効活用がこれからの課題といったところか。

いずれにしても、馴れで、センチュリーで送り迎えしてもらうのが当然などと感じるような輩にだけはなるまいと自戒している。

もう一つ、こっちの方はかなりあやしいのだが、酒を飲み過ぎて、四年間の職務をまっとうできないようでは、せっかく、一票を投じてくれた人に申し訳ないというものだ。もっともこの先の見えない時代、いつ首を差し出さなければならないかもしれず、それはしかと覚悟しているつもりである。

2つの文化に生きる

29

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー　京　子

長いと思われた夏休みも気が付くとあっという間に終わりをつげ、ついこの間まで汗を拭いながら生活していたかと思うと、もう朝晩はめっきり秋らしく肌寒いくらいになってきた。公園の河川敷にも一面まっ赤な彼岸花が咲きみだれ、自然を求めて散歩している人々の数も真夏に比べてかなり増えたような気がする。肌寒い日は日なたが恋しげに公園のベンチで日なたぼっこがてら、のんびりとくつろいでいる人たちをたくさん見かけるようになった。猛暑続きの暑かった夏からホッと一息といったところである。一年中で今が一番過ごしやすく、周りも美しい時ではないかと思う。

この夏のバーガー家の一番のイベントは何と言ってもアメリカ旅行であった。とは言っても特に何か華やかなイベントがあったわけではなく、家族、親戚、友人訪問等ではほとんどの時が費やされ、残りの時間はひたすら買い物をして終わってしまった。この買い物もばかにはできず、私以外はみんな日本の洋服サイズ・靴サイズがなかなか合わない夫や子ども達は次回アメリカに行く予定までの約一年と半年分の洋服や靴を買い込まなければならない。まだまだ成長期の息子や娘たちにとって少しサイズに余裕を持った靴や洋服を買うのは至難の業だ。毎回、行きはガラガラのスーツケースも帰りは一杯になる。これは結構、大仕事である。

今年はもう一つ、大仕事があった。それは大学のキャンパスめぐりだった。息子が来年九月から入るため、いくつかの大学のキャンパスツアーに参加した。夫の実家があるテネシー州に限って訪問したのだが、これがけっこう大変だった。大変というのは移動の時間である。テネシー州といっても広いので一ヶ所から一ヶ所に移るのに何時間もかかる。一つの大学を見るのに一日がかりだった。中には二日かけて見に行った大学もあった。このキャンパスツアーはアメリカでは長い夏休みを利用してほとんど毎日のように夏休み中、あちこちの大学で行われている。先ず、都合の良い日を予約する。だいたい、午前か午後にツアーは分かれている。全体で二～三時間の訪問だが、前半は大学事務局の方からの説明があり、後半は現役の大学生による大学キャンパス案内である。私はこの大学生たちの話っぷり、案内の仕方にすっかり感動してしまった。当たり前のようだが、はずかしがることなく、堂々とした態度で次々と建物を案内していく。突然飛び出した質問にもひるむことなく、自信を持ってはっきりと、そして少しユーモアも加えて答えていく。学生というよりも、立派な社会人といった感じだった。日本に帰ってきてから、日本の大学のキャンパスツアーにも参加したが、一般的に日本の案内の大学生は少しはずかしそうな態度をとったり、何でもない事で笑ってみたり、堂々としている態度からはほど遠いものを感じた。これはどこまでも自信満々のアメリカと、少し消極的で控えめな日本の文化を表わしているようにも思えた。

さて、夏の終わりのビッグイベントは、やはり東大宮教会の教会学校中高科夏期学校だった。今年は何と去年より参加者が十人も多い、三十一人だった。野菜の収穫、草取り、家畜小屋の掃除、魚の池作り等、決して楽な作業ではないのだが、今年も子ども達は実に良く働いた。アジア学院はアジア、アフリカの様々な事情を抱えた国々から集まっている農村の指導者を養成する学校である。「人々が共に生きるため」には何をするべきかを真剣に考え、学んでいる場だ。ほとんどの研修生がクリスチャンだが、他宗教の学生も来ている。今この不安定な世界の中でアジア学院のような草の根の働きがいかに大切かを感じる。これから社会に育っていく中高生たちに「共に生きるため」の学びの現場を経験させることはとても意義のあることだと思う。世界中の人々が共に生きるために自分は何ができるのか考えられる中高生になってほしいと思いつつ、来年の夏期学校もやっぱりアジア学院でなくては、と今から心待ちにしている。

■エッセイ■

パリのスリ

彫刻家　中島　睦雄

二十年も前の話で、いささかカビくさくなってしまったが。

私が友人のKさんと二人でパリの町を歩いている時に、スリにあった事がある。直接私に被害はなかったが、Kさんはサイフとパスポートをやられた。相手は子どものスリグループである。私は、その時の強い印象を、今でも忘れられないでいる。

ヨーロッパあたりへ旅行した人は誰でも、このようなスリ集団の存在を知っている。私達も良く知っていた筈なのである。しかも、知っていながら見事にやられてしまったという訳である。

その日私とKさんは、パリのオペラ座の前に立っていた。オペラ座の正面右の、有名な彫刻「ダンス」を見ながら、私は問われるままに知ったかぶりして、何やかと説明していた。「これが有名なレリーフ（浮彫り）の『ダンス』というやつですよ。作者はカルポー。そう、きのう見たエトワール凱旋門の右足にあったレリーフ『ラ・マルセイエーズ』の作者リュードの次の人の作品です。この二人を直線で結んで延ばすと、リュード→カルポー→ロダンとなる関係なんですよ。」などと、ありったけの背伸びをしてみせていた。

さて次はどこへ行こうかという段になり、私達は大きな地図を広げて、あっちにしようか、こっちにしようか迷った。そのうちに、ロダン美術館へ行こうと話がまとまって、二人は歩き出した。文字通りの田舎者、おのぼりさん二人が、キョロキョロと辺りを眺めながらの見物である。

街角を曲がった途端、私達は数人の子ども達に取り囲まれていた。何やら訳のわからない言葉をしゃべりながら、新聞紙の半分位の空色の紙を体に押しつけてくるのである。そして、その二～三秒後には、彼等の中の二人がKさんのサイフとパスポートを取って逃げ出したのであった。

私達は、逃げる子ども二人を追いかけた。小学校の四年生か五年生位に見えるその子ども達は足が早い。何も取らなかったが仲間の手助けをした二～三人はパッとどこかへ消えてしまった。

たくさんの通行人の往き交うパリの石畳の上を、私達は追っかけっこをしていた。そして、とうとうKさんは一人をつかまえて、彼のサイフを取り返した。私が追いかけていた子どもは、もう少しでつかまえる所まで行った時、車道の方へポイッとパスポートを捨ててしまった。そして素早く横道へ消えてしまった。パスポートは通行人の男に拾われた。私は、思わず「それは私の友達のものだ。」と、英語で叫んだ。（つもりであった）。

必死の形相を見てとったその男は、黙ってパスポートを私に返してくれた。

二人は、ほっと一息ついて近くのレストランに入り、軽い食事をし、コーヒーを飲み心理的な体勢を建て直し、ふたたび町へ出て行ったのである。

私は、何年経ってもこの体験を忘れる事ができない。一つは子どもながら、あの素晴らしいスピードと手際良いテクニックに、それと、あの小さな子ども達の生きて行く為のバイタリティ、そしてもう一つは、普通の社会から放り出されて生きる子ども達の存在に、である。

街角の石に、一人の男が腰をおろしていた。これが子ども達のスリグループの監督でありコーチであり、親玉である。そして、日常の厳しい訓練を経ての本番では、遠くからサインを送っているだけなのである。

あの子ども達も、きっと学校に行きたいに違いない。そして、沢山の友達と楽しく遊びたいに違いない。しかし彼等の稼ぎが、或いは一家の経済の足しになっているのかも知れない。少なくとも、遊ぶための金欲しさによる犯罪ではなさそうである。

そこで、では日本の子ども達はどうなんだろうと考えてしまう。

永遠に続く筈だと錯覚してしまいそうな平和な社会の中で、充分に保護され、食べきれない程の食べ物をもてあまし、充ち足りた生活をしながら、ひ弱な子どもたちが大量生産されていると言われている。そしてその反面、普通の子ども達の歩む流れの中から放り出されてしまう子ども達も、現実には存在する。問題の根はどこにあるのだろうか。

私は、あの寒いパリの街角で、恐ろしい程の危険と緊張の中で、外国人観光客をねらう子ども達の存在を、忘れる事ができない。

プ・リ・ズ・ム

子どもたちの季節

仙道家

七年間勤めた藤本保育士が産児のために退職し、替りに、四月から栄養士として仲間に加わった北谷優佳さんが藤本グループの担当になりました。移行は、慎重に行なわれました。入所以来、藤本保育士を母のように慕っていた五歳の裕にとって担当者の変更は大きな衝撃です。それでも裕は二人の保育士の計画的で丁寧な関わりの移行により次第に北谷さんに馴染み、自由に甘えを表現できるようになっていきました。

このように、移行はそれぞれの子どものなかでも特に最年少の子の精神的動揺を最小限に押さえることを念頭に進められます。他児の心のケアも同時進行です。しかし、ただでさえ心に深い傷をもつ子ども達です。小四の佳美は、昨年の四月に担当保母が退職で、今年また移行になりました。そんな佳美が北谷さんに告げた言葉は、「どうせあんたもいつかは辞めるんでしょ」でした。一度は親から引き離された経験をした子ども達、小学生にもなると、一方で衝撃を受けながらも、他方で移行に慣れる術を得ています。『責任担当制』『家庭的養護』を柱にしている〃我が家〃も、やはり「施設」なのだと思い知らされる時です。

長い夏休みは、そんな北谷グループにとってはとても大切な絆を強める時間でした。北谷さんは、公休日にも子ども達と過ごし、同時に栄養士としての職責も果たしながら、渾身の努力で夏を乗りきりました。

この仕事には一発逆転大ホームランは殆どありません。日々の地道な生活の積み重ねが子ども達のより良い発達をさせます。

二学期、北谷グループの第一章第二節が始まりました。

梶原　完

原田家日記

厳しい暑さが続いた夏休み、原田家の子どもたちはさんさんと降り注ぐ太陽にも負けず元気に過ごしていました。幼稚園にも小学校にも行かず子どもたちが一日中家に居るということは、多くのエネルギーを費やしますが子どもたちの様々な姿、表情、変化や成長をリアルタイムで感じることができ、楽しく嬉しい時間でもあります。

悠花にとって幼稚園生活初めての夏休み、そして私のグループで迎える初めての夏休み。小さな体で活発に遊び、けらけらと可愛く笑っている印象の強い悠花ですが、いつでもどこでも右手の親指をちゅぱちゅぱと吸い、左手は誰かの耳や腕をすりすりと触っています。そうしていないと自分を保てないのでしょう。安心できないのでしょう。日常の関わりで悠花の心を充分に満たしていないことを申し訳なく思っています。

『担当者との安定した関係を築く』ことを夏休みの課題にしました。行事が続き一週位間離れていたりでなかなか時間が確保できなかったのです。お盆に私の実家に連れて行き、海水浴やアスレチックなどをして、三日間を悠花も私も心から楽しみ、二人の距離が少し縮まったかな、と悦に入って帰ってきました。

しかし数週間経ったある日、悠花は大声で夜泣きをしました。翌朝、悠花は「ハットリさんが隣で寝ていなかったから怖かったの」と言っていました。同じ部屋で寝ていても隣に居ないと安心できない状況がまだあります。

今日明日で出来るものでは決してないが、今日明日は掛け替えの無いものであることを心に留めて、ゆっくりと関係を築いていきたいと思っています。

服部　沙絵子

光の中で

佐藤家

暑い夏も終わり、過ごしやすくなりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

今年の夏休みも、沢山の方々のご好意で、子どもたちは、海に山に楽しい思い出を作ることができました。私も付き添いで、色々な所に行く事ができました。

去年は、体調不良で小学生と一緒に登山できませんでしたが、今年は一緒に登山に挑戦しました。今年は、一年生がいないので、赤岳に登る事になりました。しかし、登山出発の時、霧雨が降っていたり、登山入り口を間違え、結局女の子は、小天狗、男の子は大天狗までで終わりになってしまいました。それでも、初めて登山に挑戦する私にとっては辛く、小学生たちの力のすごさを思い知らされました。特に、私の担当する美季が、頑張っていたのには、感動しました。去年も頑張っていたのは聞いていましたが、実際一緒に登ってみて、美季の頑張りを目の当たりにし、嬉しく、幸せな気持ちになりました。

今年幼稚園の静一は、夏休みに入って、毎日毎日朝から暗くなるまで外で遊び、真っ黒になり、体も大きくなった夏休みでした。色々な経験を通して心も成長しました。

毎年、聖学院大学の学生さんたちが草取りのワークキャンプをして下さったり、子どもたちと遊んで下さいます。今年は、一緒に八月生まれの誕生会を盛り上げてくれました。そこで聖学院の学生さんたちが、組体操を披露してくれました。静一は、今までどんな歌や演奏を聴いても、皆が聞き入っている中一人できょろきょろと心ここにあらずという感じでした。しかし、組体操、ピラミッドの時は違いました。今までにない真剣な顔で見入っており、見終わった後はニコっと笑顔で「楽しかったね」と大好きな中川さんに言っていました。そして、歌のときも聞き入っており、その姿を見て、私は幸せな気持ちになりました。そして、こんなにかわいい静ちゃんに出会えたことを嬉しく思いました。

この夏一回りも二回りも成長した子どもたちと一緒にいられることを幸せに思い、これからも一緒にいたいと思った夏でした。

市川　美穂

河のほとりで

倉澤家

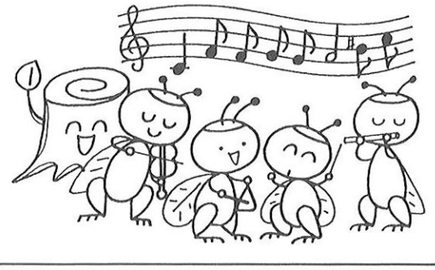
亜希と沙慧は十四年間同じ担当グループで暮らしてきた。ふたりは普段から、べたべたと仲が良いというのとは違うのだが、お互いにかけがえのない存在になりつつなる。

亜希は、横着者の沙慧に代わり洗濯物を干したり、たまったゴミを捨ててやったり、沙慧本人が忘れてしまっているようなことまでしっかり覚えていたり、時には「沙慧の傍にいると落ち着くんだ。」と、用があるわけでもないのに部屋で一緒に過ごしている様子。

沙慧は、亜希が他児からマイナスを被ると自分のことのように憤慨し相手に嫌悪感を持ったり、来年卒業予定の亜希が住居の心配をしていると「ここにいれば。私と一緒の部屋でもいいよ。」と、六畳にも満たない狭い部屋に一緒でいいとさえ言うのである。

こんな二人の様子を見ていると、担当者としても嬉しい気持ちになる。もうすぐ社会へ出ていく二人である。辛い時、悲しい時にお互いに支え合えることのできる存在であり続けて欲しいと願っている。

倉澤　智子



現場から

続・光の子らしく ④

岩崎　まり子

夏に珍しいといわれた台風が去ってからも、いくつかまた台風がやってきましたが、皆様のところの被害状況はいかがですか。被害に遭われた方々にお見舞い申し上げます。

それにしても、台風が過ぎ去ったあとのあの夕焼けの美しさ！嵐の名残の黒い雲を取り囲むようにして空が黄金色に輝き、やがて薄暮にいたるまで、刻一刻と変わっていく様の何とドラマチックだったことか。

ドラマチックと言えば、この夏休みもたくさんの方々のお心遣いのお陰で、子どもたちに色濃い思い出を残すことができました。心から感謝しています。

幼児たちや小学生たちが八ケ岳に今年も挑戦できたのは、ベースキャンプとしてお宅を提供して下さった谷本先生のお陰です。「頑張れ！」の励ましの声に「もう、頑張れって言わないでよ」と泣きべそをかいていた年長組の宗ちゃんですが、泣いたり、笑ったり歌ったりしながら最後まで歩き通しました。普段は担当者に「抱っこ！」とぐずったり、ただのお調子者（失礼）のように見える彼ですのに。

この幼児グループの登山には、勿論うちの最年少の二人も参加しました。リュックから手足が出ているような後姿で、自分の足の長さ程もある岩場を登っていく和ちゃんの逞しさ。途中「中川たんはやだよお。」と自分を追い立てるように登らせる中川に対して、泣きながら抗議していた姿はご愛敬。ゴール地点で美味しいアイスクリームを食べていたもう一人の最年少の李奈ちゃん。駐車場のへりに腰掛けながら食べていると、力尽きたのか、その腰掛けて食べているその姿勢のまま、スローモーションのように後ろにひっくり返ってしまったのでした。その手にアイスクリームもそしてスプーンも、しっかり握られていたのは言うまでもありません。

山の生活は、私自身とても楽しく、リラックスした数日を過ごすことができました。

さて、この夏のトピックスはいろいろありますが、何といってもアメリカから留学生が来たことでしょう。生物学専攻で、日本語を習っていて、日本の文化を学びにはるばる埼玉までいらっしゃったのです。彼の名前はジミーさん。台湾生まれの方です。

国際化社会と言われながらも、その影響のない普段の生活です。「ジミーさんの食事場所は佐藤家」と言われたとき、億劫が先にたってしまって何とも憂鬱な思いでいました。

そして私たちの日の前に現れたジミーさんは、名前の通り（？）派手な方ではなく、出すぎることなくしみじみとした感じで、デリケートに佐藤家に溶け込んできて下さいました。そのうちに佐藤家もだんだんと国際化されてきたのか、そこここで「おーまいがー」（「Ｏｈ，ｍｙ　Ｇｏｄ！」）「ワオ！」などの言葉が聞かれるようになり、ジミーさんが子どもたちのことを微笑みながら見つめ、「かわいい」と呟くようになり、彼を入れた食事の数が当たり前になった頃には、二ヵ月という約束の日がもう目の前でした。

歓送会の夜、彼は、とても真心のこもった挨拶と歌を私たちにくれました。彼にとっては、かなりハチャメチャな受け入れ先であったと思います。言葉が不自由な彼に対して何の配慮もしてあげられませんでした。また、日本文化ー文化などというものに関しては、およそ該当外という、申し訳ないありさまです。

きっと彼はもっと深いことを話し合いたかっただろうし、伝えたかったこともっと、たくさんあったことと思います。

けれど最後の日、ジミーさんに頂いた折り鶴を見て思うのは、大切なことは言葉だけではないんだなということです。

「出会い」そのものが、とても大切なのだと思うのです。

この夏も沢山の出会いと別れがありました。毎夏出会っている方も、今夏限りの方もいますし、この夏初めて会った方もいました。

どの方とも出会えたことを心から感謝して別れられるというのは、決して当たり前のことではないということを知っているだけに、今、こうして思い出したとき、どの出会いにも感謝できることを心から嬉しく、そして誇らしくも思います。それは、出会った方々のすばらしさに依っているのです。

そんな素敵な方々を私たちががっかりさせることのないよう願い、努力していきたいと思います。

この夏、私たちに足元を見直す勇気と、そこからまた歩きだそうとする元気を下さった皆様へ、感謝をこめて。夏の報告でした。

養護メモ 89

出　発

菅原　哲男

萌季が出発つ。

十七年前の七月末。小さな小さな体を硬直させて萌季はやってきた。

その日は、強い日射しが打ちっ放しのコンクリートの建物を囲む赤茶けた砂土を白く浮き立たせていた。

初めて担当の子どもを受け入れる岩崎も、不安でいっぱいの硬い表情に精一杯の笑顔を浮かべて迎えた。

子どもたちが寝入ったある夜、岩崎に、「萌季をまっすぐに育てることが出来たら、養育のノーベル賞をもらえるよ」と言った記憶は今も鮮明である。とりわけこの子の養育の困難性を実感していたのである。

その萌季が十八歳の秋、アメリカに出発った。

萌季は双子の長女で、難産が原因で生んだ母を虐待に走らせた。児童相談所や親族などの話から、その程度は残酷を極めていた。

入所当初は、硬い表情で人の顔色を窺うようなしぐさが殆どで、抱くと棒きれのように体を固くして何ともぎこちない子どもだった。抱っこしている岩崎が「手を肩にかけるんだよ」などと言いながら、小さな手に手を添えて肩にかけるように抱っこのされ方から教えた。

岩崎は、休日に萌季と外出して楽しい時間を共にしたり、実家に連れ帰ると岩崎の両親が孫のようにかわいがって下さった。幼稚園に入るとピアノを習わせるなど、母親のように連れ添って育ててきた。

入所前後に母や祖母は養子に出すよう児童相談所に申し出た。父がこれを拒否し、いつか自分が育てたい、と私たちを頼りにしてきた。

そんな萌季が小学二年生の終わり頃から「家族」や母のことをしきりに尋ねるようになり、岩崎は困り果ててしまっていた。

虐待を受け、愛される経験の少ない子どもたちが急増の今日とは違って、幸せにもその頃は虐待という言葉が未だ市民権を得ていなかった。

萌季は、「私のお母さんは？」「兄弟はいるの？」と、電車で隣り合い、二人で風呂の時、添い寝の折りなどに岩崎に問質し続けていた。

たまりかねた岩崎が何度も、「どうしましょうか」「いつまで待たせるんですか」と手がかりや方法を考えあぐねていた私に相談してきた。

精神医学書を拾い読みし、臨床心理学などを学びに東京に出るようになったのはその頃だった。

親や家族の協力を得られない児童養護施設での真実告知は全く雲をつかむようなものだった。まして虐待の事実を知って生きる勇気など・・。

また、光の子どもの家の子どもたちの親の殆どが心に傷や病を抱えることから、児童精神医の菅野ドクターや臨床心理士の角張先生などが職員の子どもへの関わりなどについてのスーパーヴァイズをお願いし月に一度程度おいで頂いていた。

その人たちに、真実告知の知識や技術について相談に乗って頂いた。

言葉が理解出来てやりとり出来るようになり、自分の境涯や、自分が何者であったのか、そして何者であり得るのかというアイデンティティの確認への欲求が十分に表現された時にそれは行うべきだということが確認されたのだった。

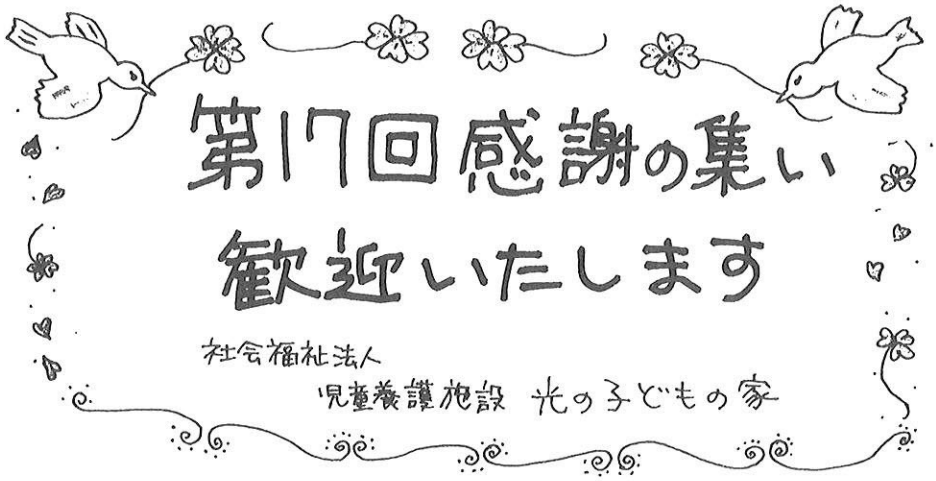
外科医のメスのように研ぎ澄まされた鋭利な言葉と、出来るだけ小さな傷ですませる卓越した技術とがなければいけないことにも思い至った。また、この人の言うことならば本当のことで、大丈夫だという信頼関係も必要不可欠なことも。

一ヶ月に複数回は面会にやってきて、私たちともよい関係にあり、萌季にとっては唯一の親しい家族と言っていい萌季の父に、ほんとうのことを萌季に伝えてくれるように頼んだが、父は、とてもそんなこと出来ないと断わられてしまった。おまけに、先生が一番いいと思うからやってください、とも頼まれてしまった。

それからも児童精神医の佐々木正美先生とお会いして話を伺ったり、知見を集めながら、児童養護施設における真実告知のあり方を求め続け、他でもない光の子どもの家の、誰でもない萌季へのそれを模索していた。

そしてとうとう、萌季が小学三年の冬、彼女がいつかここを出ていく時に、生まれたことや自分の存在を肯定し、どこででも人と出会えたことを喜びにすることが出来る人格に成長することを心から願い、祈りながら、母の心の病と初産時の激痛、それが萌季を愛することが出来なくなった原因であること、そして二人の姉妹を含めた他の家族が普通の暮らしをしていることなどを、言葉を選んで伝えた。

伝えられた日、彼女は台所にいた岩崎に駆け寄って、伝えられたことをかいつまんで話し、上機嫌で岩崎を手伝ったのだった。（以下次号）



日誌抄 ＝子どもと創る暮らしの風景＝ 4月1日 ▶ 5月末日

4月

幼児９名 小学生８名 中学生５名 高校生８名 計３０名

１日 北谷優香保育士兼栄養士就任

６日 進級進学祝い

９日 西沢美保幸手商業高校 渡部英司久喜養護学校高等部へ入学

１０日 久しぶりの家族や担当保育士に手を引かれて大利根藤幼稚園に４名が入園

１３日 第１６回子ども祭計画開始

１５日 一時保護から措置入所となり、家族関係調整を進めて昨年度末家庭引き取りとなった加藤優美と家族がご挨拶に来訪し交わりを温める

２１日 後援会総会 島田町長もおいでになって

２３日 第５１回職員会議 各家での生活の様子の報告 年度の切り替えに伴い幼稚園入園や養護学校高等部入学などの環境の変化に対応しきれない子どもたちの不調が対応をはるかに超えている状況が確認された

３０日 第１６回子ども祭へ向けて中学生・高校生が盛り上げようと準備に力を注ぐ

今月の物品ご寄贈者 葉山町 吉本和子 北川辺町 北川辺伝道所 上尾市 白田加須市 横村スミ子 大利根町 大利根藤幼稚園 国立市 鈴木重義 今泉祥子 鈴木あや子 古沢 社団法人日本魚肉ソーセージ協会の各位様

5月

１日 病気療養の神田幸枝の代替保育士赤秀弘美就任

４日 第１６回子どもまつり 学校の友人や家族 卒業生や関係者など８０名余が参加してにぎやかにそして楽しく屋台やパン食い競争などなど

５日 原田家梶原赤秀グループが小田原箱根１泊旅行

７日 第８回職員確保のためのバザー準備開始

９日 後援会赤十字奉仕団合同草取りご奉仕 感謝

１０日 加須市の無職青年相談来訪子ども支援センター泊

１４日 ＴＶ朝日スーパーＪチャンネルで光の子どもの家の生活や取り組みが放映 ３ヶ月に亘る長期取材が実り電話・来訪・手紙などの反響８０件余

○ 第１回バザー委員会実施

２３日 県内児童養護施設あゆみ学園５名が来訪し見学と情報交換の１日

２５日 第６３回理事会開催 ２０００年度事業報告及び決算報告案承認など

３１日 藤本曜子出産準備のため退職 優れた働きに感謝

今月の物品ご寄贈者 川越市 日本キリスト教団高階教会柿内加須市 野本百合子 横村スミ子 梓沢あずさ 島田彩子 島崎なぎさ 星野敏恵 斉藤米店 大宮市 相良ゆみ 大利根町 プランテーションオオタニ 田尻の各位様

お支えをお受けして新たな年度を歩き始めました （くら）

反射光

☆酷暑が懐かしく感じるようになりました☆やられたらやり返せ！と世界の俊秀たちがその知と技の粋を集めた殺人マシンを駆使して「戦争」が始まりました☆マスコミ報道に子どもたちをさらしながら救し合うやさしさを伝えることが更に困難になりました☆この世紀も正義は力なのでしょうか☆とすると弱い者はどこまでも不義なのでしょう☆弱く保護されること以外何もない子どもたちはこんな事態で必ず殺され傷つけられていくのは歴史が繰り返し示してきました☆検証のない断定とそれに基づく非難合戦は「戦争」の現象だけではありません☆進歩的文化人と自称他称される人々も意外に大雑把で乱暴であることもまた歴史が教えます☆孤立した家庭における弱い者への暴虐からの救済は何よりも急務ですがこの「戦争」がしばらく忘れ去らせるのでしょうか☆称讃も誹謗も関わりない人と人との暮らしのなかに救し会い隣り合う平和を創り出すことこそを！更に☆伏して乞うご支援！ （哲）